
恋の悩みを知る君は

来栖ゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の悩みを知る君は

【Nコード】

N8407X

【作者名】

来栖ゆき

【あらすじ】

見知らぬ外国人からの突然のプロポーズ。
けれどそれは人違いで……。

ひよんな事から日本で恋人を探すイタリア人ベルナルドとの不自然な同棲生活が始まったOLアゲハ。

叶わぬ恋だと知りながらもだんだんと彼に惹かれてしまっ、甘くて苦しい片想い。

恋人を見つけて彼の想いを成就させてあげたい！そう思った矢先、

事態は思わぬ急展開を迎えて……。

アゲハの日常が少しずつ変わっていく恋物語。

「結婚しよう……」

見知らぬ外国人からの、突然のプロポーズ。

慈愛に満ちた青い瞳に見つめられ、あたしは何も言えなくなってしまった。

彼はその場に片膝をついてひざまづ跪き、あたしの左手の甲にそっと口づけをした。

その瞬間、心臓がトクンと跳ねる。

彼は器用にも片手で小箱の蓋を開けると、中から青い宝石の付いたシンプルな銀色のリングを取り出した。

そして、あたしの左手の薬指にゆつくりと通す。

あれ、あたしこの人と結婚するの——？

月末で、金曜日で、残業で、コンビニ弁当と缶チューハイの入ったビニール袋片手に、一人暮らしのアパートへ帰ってきた夜9時43分の事だった。

あたしの部屋の前に見知らぬ男が座っている。視線は空に昇った細い三日月。

日本人とは思えない、鼻筋の通った横顔が印象的だった。毛先が少しカールしている黒髪は耳にかかるくらいの長さ。

あえて言おう、イケメンだ——と。

彼はあたしに気付くと、サファイヤのような青い瞳でじっと見つめてきた。

やめてよ、ちょっとドキドキしてきちゃうじゃない。

「あの、あたしの部屋なんですけど、何か御用ですか？」

って、日本語が通じるとも思えない。でも英語で何て言えばいいのか解らない。

どうしようかと思い悩んでいたら、その外国人はすっと立ち上がった。

濃いネイビーブルーのジーンズに黒のＴシャツ。ぱっとしない服装だけどなんでだろう、外国人が着ると何でもカッコイイって思ってしまう。

しかもこの人、背がめっちゃくちゃ高い。多分180センチ以上あると思う。160センチのあたしと比べて、だけど。

だから彼が立ったら結構な角度で見上げる形になった。

そして何故か、満面の笑顔であたしを見ている。

何で……？

そして、件のプロポーズ……。

「あれ、おかしいな」

彼の意見に激しく同意。確かに色々とおかしい。

リングのサイズが小さすぎで第二関節で止まった。

こう……プニっと。

リングの周囲にはみ出たお肉が乗っている。

それから、どう考えてもこの人とあたしは初対面のはずだ。「結婚しよう」の前に「初めまして」という挨拶の方がしっくりくる。

そして極めつけ。この外国人、日本語が流暢すぎる。その青い目は本物？

彼はどうにかリングを指に通そうとするが、第二関節の骨はリングの内径よりも太いのは明らかだ。

いい加減恥ずかし過ぎるんですけど……。

遠回しに太っているのでは？と仄めかされている気がしてならない。一応服のサイズは9号なんだけどね。

女性としてこういう所は敏感なのだ。

「あの、いくらやっても入りませんけど」

ちよつとムツとした声になってしまった。だって初対面で「指、太くね？」みたいな事されたら誰だってムツと思う。

彼は跪いたままの姿勢からあたしを見上げた。指輪を押し込むことを中断すると、優雅な仕草で立ち上がる。

けれど手は握ったまま。

秋風に冷えたあたしの指先は、彼の熱によって温められている。

「でも、リングのサイズは7号と聞いたよ？」

あたしは聞かれた事ないけど、9号ですから！

——彼が跪いて手の甲に口付けした時、どこかの国の王子様かと思っただのは確か。駅のホームかどこかの横断歩道ですれ違って、こ

の人はずっとあたしを探していたのだ。

家来に命じて居場所を見つけ、こうしてあたしを迎えに来た。そう、プロポーズをする為に。きつとアパートの前には力ボチャの馬車かリムジンが待っているのだ。

金髪じゃないのは百歩譲って許そう。

なんて、手の甲への口付けからリングが指にプニっ事件までの間、あたしの脳裏を駆け巡ったその妄想は、リングのサイズが合わなかったという辱め^{はずかし}により、ガランガランと音を立てて崩れ落ちた。って言うか、家来っていつの時代の王子よ。しかも王子が駅のホームとかいないから！

まったくもって自分の妄想に辟易する。

そう、これは、きつと……。

「人違いです。誰か他の女性と間違えていませんか？」

「僕だよ、ベルナルドだ」

会うのは久しぶりだから解らないかな、と苦笑いで微笑む初対面の男に、あたしも苦笑いで返す。

「ごめんなさい、本当に人違いだと思う」

だって、プロポーズしてくれる外国人の知り合いなんてあたしにはいないんだもん。

あたしの名前は深山揚羽^{みやまあげは}——読んで字の如くミヤマアゲハ、26歳。

蝶でもなければキャバ嬢でもない。正真正銘、あたしの本名。疑うなら免許証見せようか？

こんな名前を付けた親を恨みがましく思った事もあったけれど、この変な名前のお陰で第一志望の大手IT企業に就職できた。

「ミヤマアゲハって蝶々だよね？」

面接で開口一番にそんな質問を投げかけた人事部長の趣味はまさかの登山と写真だった。最初は意味がわからなかったけれど、山に

登って蝶や花の写真を撮るのだそう。

お陰で内定即ゲット！

安定した会社でそこそ良い給料を貰いながら、営業事務4年目。悲しいかな、彼氏イナイ歴も4年目に突入。就職と同時に年下の彼氏とは別れてしまったから。

このアパートには引越しをして明日で1週間。別に新しい一步を踏み出したかったわけじゃないんだけどね。

会社からは2駅という距離で、アパートの前にはやや大きめの自然公園がある。結構気に入っている立地なのだ。

「どうぞ……」

まあ、インスタントコーヒーなんだけど。

彼はありがとう、と日本語でお礼を言って一口飲んだ。

あたしはコーヒーにたっぷりホットミルクを注いでカフェオレにした。夕食もまだなのに、空腹にブラックはちよつと無理。

玄関を入ってすぐのリビングダイニング。猫足のテーブルを挟んで座る、あたしと、ベルナルドと名乗った外国人。

2人きり。

さて、これからどうしよう……。

「あの、もう理解はできました？　ここは1か月前から空き部屋で、あたしが1週間前に越して来たんです」

日本語が通じる事にほつとして、外があまりにも寒くて、しかも人違いだやつと信じてくれたこの人が捨てられた子犬のような瞳で、行くところがない……とか呟くものだから、ついつい部屋に入ってしまった。

まだ誰も招待した事のない部屋に。

「彼女はここにいないんですか？　ならどこにいるんですか？」

……そんなの、あたしが聞きたいわよ。

ベルナルドがプロポーズをする為に会いに来た女性は、1か月前に引っ越した後だった。

「引つ越し先はあたしには解らないです」

「そう、ですか……」

ああもうつ！ 幻覚だけど、垂れた耳と尻尾が見えるのは気のせい。幻覚だけど。幻覚だけどね……！

お願いだからそんなにヘコまないでよ。

「電話番号は？ メールアドレスは？ 勤め先は？ なにか聞いてないんですか？」

ベルナルドは恋人から最後に届いたらしいエアメールを握っていた。

けれどそこには住所と名前しか書いていない。

そう、ここの住所が。

そして差出人の名前は——真田優花。さなだゆうか

彼ははるばるイタリアから、住所と名前だけしか知らない女性に結婚を申し込む為に来たのだ。

い、一途すぎる……。

頭をナデナデしたくなるのは、あたしだけじゃないハズ。

「解ったわ……明日このアパートの管理会社に電話してみます。望みは薄いけど、前の住人に連絡取ってくれるかもしれないし」

途端、ぱああと表情を明るくした。

ちよつとくらくらする。イケメンの不意の笑顔は、一人暮らしの独り者にとっては猛毒だ。

「大丈夫ですか？」

少し眩暈を覚えて額を押さえたあたしに、ベルナルドはテーブルに乗り出して心配そうな顔を向けた。

「大丈夫、デス……」

ほんとは大丈夫じゃないけれど。

ベルナルドの荷物は小さいスーツケースと瓢箪ひょうたんみたいな形をした楽器ケースだけだった。

本当に身一つで日本に来たみたい。

「あの、優花さんには日本に来る事、伝えてなかったんですか？」
聞いていいのか解らなかったけれど、好奇心には勝てない！
プロポーズ大作戦を決行するために国境を越えて来たというのに、
相手が行方不明というのはちょっと切なすぎるよね。

サプライズを計画して失敗したのならとんでもなく不憫ふびんでならない。

「伝えました。結婚を申し込むから待っていて欲しいと——」

ベルナルドはマグカップを両手で掴み、中の黒い液体をじっと見ている。

「ユーカは喜んで、待っていると手紙をくれました……」

「それは——何年前の話ですか？」

ちよつと見知らぬ優花さんに同情してしまう。女は期待させておいて待たされるのは嫌いなものよ？

「大体ひと月前です。それから色々準備をして、パスポートを用意して日本に来ました」

あら、前言撤回。

という事は、優花さんって人は待っているという手紙を投函してこのアパートを出払ったという事だろうか……。

どうしてこんなイケメンのプロポーズ予告を受けていなくなったのかしら？

あたしだったら喜び勇んで結婚雑誌を買い漁って、一人でもいいから式場に見学に行って、そうそうあとエステにも通わなくちゃいけない。会社は……。寿退社には懂れるけれど、子供が出来るまで続けるか、産休を取るか。

うーん、こればかりは相手の稼ぎによりけり、ね。

でももしイタリアに行く事になってしまったら会社は辞めないとダメだね。あたし英語喋れないのに海外でうまくやっていけるかしら。あ、違う、イタリア語か。

どうでもいい妄想に花を咲かせていたら、ベルナルドは不思議そうな顔であたしを見ていた。急に黙って眉間に皺を寄せて、大真面目にくだらない未来を考えているあたしの顔を。

「アゲハさんが突然黙ったから、どうしたのかと思って」

「ご、ごめんなさい、優花さんがどこに行ったのかって考えていて……」

あたし、咄嗟に嘘を吐く――の巻。

会話中に妄想トリップなんて最悪だ……。

けれどベルナルドはそれを聞くと、憂いを帯びた瞳で微笑んだ。

「アゲハさんは優しい人ですね」
グフツ！

今のはダメージが大きい。本当は阿呆みないな妄想してました、なんて死んでも言えなくなってしまった。これはもう墓場まで持っていくしかない。

「それにしてもどうして手紙なんですか？ メールや電話だったらすぐ連絡がつくし、便利だと思いますけど」

「うん、どうしてかな……」

ベルナルドはテーブルに置いてあったエアメールの宛名をそつと指で撫でた。優花さんが書いた彼の住所と名前の部分を。

彼女の文字までも愛おしむような、優しい表情で。

まあ、そりゃメールよりも手紙の方があつたかいし気持ちちがこもってるよね。国際電話も高そうだし。

愚問でした……。

「もしかして……引越しましたっていう手紙を出したのかもしれないですね？」

とりあえずフォロー、自分に対してだけど。

「では行き違いになってしまったのかな。どうしてもユーカに早く会いたくて……性急過ぎたでしょうか？」

「そんな事ないですよ！ 早ければ早いほど嬉しいですって！」
羨ましすぎるぞ優花さん、アナタとんでもなくイイ男にめっちゃ
ちや愛されちゃってますけど！

でもその割には……間違えたのよね、あたしと。

「その優花さんって人は、あたしと似てるんですか？」

誰だって気になるでしょ？ イケメンをここまでメロメロにする
女性の存在が。

あわよくば今後の参考にしなくては！

けれどベルナルドは言いにくそうに後頭部を掻いている。

もしかしてあたしなんかと間違えてしまった事が言いにくいの？
もしも優花さんがあたしと似ても似つかない美人だっていうなら、
間違えた自分が許せないと思うのは解るけど。

解るけどね……。

その返答によつては、もれなくあたしもショックを受けるわよ？

「実は……ユーカには一度も会った事がないんです。彼女は僕の顔
を知ってますけど」

「はあ！？」

変な声が出てしまったのは確か。あと、テーブルに乗り出してベ
ルナルドの顔をまじまじと見たのも、彼が一瞬怯えた表情になった
のも。

あたし、目が血走ってたかもしれない。

だっておかしすぎるでしょ、この人は顔も知らない相手にプロポ
ーズしようとしていたの？

「5年間ずっと手紙のやり取りしかしていません」

「そう、なんですか……？」

ああそうか、だからあたしと間違えたのか。この住所に帰ってく
る女性が自分の結婚相手って事なのね？

だったら「結婚しよう」って言われた時にあたしがイエスと言え

ば良かったわけだ……。

って、良くないし！

「顔も知らない相手と、その……結婚しようと思ったんですか？」

この質問は当たり前だと思う。

見知らぬ文通相手にいい人だな、って思う事はあっても、結婚しようなんてぶっ飛んだ発想は、普通は出来ない。あたしだったら絶対そんな人からのプロポーズなんて受けないと思う。

5年間手紙のやり取りをしてプロポーズされて、OKだした後に会って、相手がとんでもなく……だったら結婚出来る？いや、出来るのかな？そんな状況になってみないと解らないけれども。

でも、とりあえず初期の段階で写真送り合わない？って提案する。あたしなら。

それなのに……。

「人は顔じゃないでしょう？ 少なくとも僕は顔だけで人を判断しません。彼女は心の綺麗な女性です」

それなのにベルナルドは、あたしの遠回しな「人間顔でしょ」発言にムツとして優花さんを擁護した。

青い瞳には情熱の炎がメラメラと見えるようだ。

この人、本気だ……本気で会った事のない優花さんの事を愛している。5年間も文通して彼女の人となりを知って、それで結婚しようと思ったんだろうな。

世界の常識を覆す気なんだ……男女は出会ってから恋愛するっていう常識を。

こんなの小説か映画でしか聞いた事ない。お互い顔も知らない男女が手紙を通して心を通わせ、色々な障害を経て最後に結婚するのね！ あたし感情移入してラストで泣いちゃう気がする。

「ごめんなさい」

これは全面的にあたしが悪い。だからきちんと謝っておく。

「優花さんって……とっても素敵な人なんです」

そんな彼女と比べて、あたしは性格があまりよろしくないみたい。

さすがにこれはちょっとへこんだ。

最後に幸せになるのは、何があっても諦めない心の綺麗なシンデレラ……それが優花さん。あたしは何も努力しないで、いい出会い落ちてないかな、いい男いないかななんてぐうたらと生活している義理のお姉さんってところね。

そして当然シンデレラの前には心優しい王子様が現れる。義理のお姉さんの前には……顔は良いのにイジワルな会社の先輩くらい？「ユーカはね、とても優しくて頑張り屋さんなんだ。僕が夢を諦めかけた時、ずっと応援してくれた。自分も頑張るから一緒に頑張ろうって言うてくれて……」

黒髪に青い瞳を持つ見目麗しい王子様（もちろん売約済）は、はにかんで頬を染め、マグカップの持ち手部分をいじりだした。

なにこの可愛い一面は！ 照れてるの？ 王子様が照れてるよっ！「じゃあ、早く見つかるといいですね」

「ありがとうアゲハさん。あなたもとても優しい人です。見知らぬ異国の人間を疑いもせず部屋に入れてくれて」

青い瞳を細めてベルナルドに微笑みかけられた。ああ、やっぱりイケメン……！

つられてあたしも笑ってしまった。多分ニツコリじゃなくてへらつとした、なんとも言えない顔になってたと思うけど。

よし、明日の朝に管理会社に電話して、解らなかつたら大家さんにも直接聞いてみよう。このアパートの隣に住んでいる大家さんは噂好きの近所のおばさんだったから。

引っ越しの挨拶に行った時、恋人はいるのかとか根掘り葉掘り聞かれた。だから優花さんの事も何か知ってると思うんだ。

そうと決まったらさっさと夕飯食べてお風呂入って――。

あれ……。

「あの、つかぬ事をお伺いしますけど、ホテルとか取ってないんですか？」

行くところがないって言うから、つい部屋に入れてしまったけど。
「あ……会いたい一心で、飛行機のチケットしか取っていませんでした」

うつ。一途すぎて羨ましいぞ優花さんっ！

じゃなくって、女性一人のアパートに、さすがに知らない男を泊めるわけにはいかないでしょ。

どうしようかな、とちらつと見たら彼も察してくれたらしい。

「すみません、荷物は明日まで玄関に置かせて貰えますか？ 僕は朝までその公園にいますから」

コーヒーをご馳走様でした、と言ってベルナルドは立ち上がった。
え、ちよつと待って！ 外寒いよ！ 天気予報では深夜に雨って言うってたよ！

「一晩くらいならいいですよ！」

気付いたら、あたしはそう言っていた。

ベルナルドは驚いたような顔であたしを見ている。

そりゃそうか。

初対面の男女が出会った当日一つ屋根の下……。

マチガイが起きてもおかしくないって？でもそれは100%有り得ないと思う。

マチガイなんて全然起きそうもない、だってこの人「優花ラブ」だし。

单身異国にやって来て、プロポーズをしようと思った女性が行方不明、泊まる場所もない。そんな人を寒空の下に追い出すなんて、あたしはそこまで鬼じゃないわよ。

「一晩だけです。風邪なんか引いたら大変です」

そつ、彼の一途さと誠実さに得点1。

「……いいんですか？」

申し訳なさそうにおずおずと聞き返すベルナルドに、あたしは精一杯の笑顔を向けて快諾しようとした。

けれど、あたしの胃はどうやら限界らしい。グーと大きな音で食べ物を要求してきた。

「タイミングってものがあるでしょ。空気読んでよね、あたしの胃！
「フフッ」

ベルナルドの曇った顔が一転、太陽の日差しが射すようなまばゆい笑顔で――笑われた。

「し、仕事終わってまだ夕飯食べてないんです！」
笑う事ないじゃないの、もう。

「ごめ、なさい……」

それでもベルナルドは笑う事をやめない。
すぐ食べるから、とコンビニで温めてもらった牛丼は、蓋に水滴を残して冷え切っていた。

色気のないあたしの夕飯、温め直すか……。

げっ、すぐ近くだからって一緒に袋に入れてもらった缶チューハイがぬるくなってる！

あちゃー！。

今朝は9時起床。せっかくの土曜日なんだからもう少し寝ていた
いんだけど、あたしはちよつと早めに起きた。

だって、ねえ……。

そそくさとスウェットを脱ぎ捨て、もう少し見栄えの良いジーンズとストライプの長袖シャツに着替える。パジャマ代わりのスウェットは毛玉だらけで伸びきっていて、とても着心地の良いものだけ
ど、ちよつと男性に見せるわけにはいかない状態なのだ。

うーん、新しいの買おうかな……。

そつと寢室のドアを開けると、ソファの端が見えた。あたしはもう少し開けて顔をひよいと出す。

カーテンを締め切った薄暗いリビング。ソファの背もたれを倒せば簡易ベッドなるそれに、毛布に包まれた丸い物体を発見した。

ゆっくりとした規則正しい呼吸の上下運動が見える。ベルナルドはまだ寝ているみたいだ。

大きい身体を猫のように丸くして寝ている姿を想像して、あたしはプフッと噴き出した。願わくば、毛布をひんむいて確認したいけれど——ダメだってばあたし！

「ベルでいいよ、友人にはそう呼ばれているから」

昨夜、ベルナルド——もといベルはあたしに気を聞かせてそう言うてくれた。もっと早く言うてよね！　っていうのはただの逆恨み
だけ。

実は、ベルナルドさんつて言おうとして何回か舌を噛んだ。

代わりにあたしも呼び捨てにしてもらって敬語も無しにした。アゲハさん、なんて呼ばれ慣れなくてくすぐった過ぎるもん！

あたしは寢室からそつと抜け出して洗面所へ向かうと、顔を洗っ

て軽く化粧を始めた。

スッピンは無理！ でもがつつり化粧するわけにもいかない。だって意識してるみたいで……。

まあ、多少なりとも意識はしちゃうけど。でもそれはしょうがないでしょ？ イケてるメンズが一つ屋根の下にいるんだから。

「さて、やる事はやったわ……」

あたしは腕を組んで洗面所の壁に寄りかかり、そこから6畳ほどのリビングダイニングを眺めた。

この部屋は無駄に1LDK。だから知らない男の人と同じ部屋で寝る——という事態にはならなかった。そうじゃなかったら、そもそも「泊まってく？」なんて気軽には言わなかったけどね。

一人暮らしだから1Kでもいいんだけど、玄関開けてベッドが丸見えっていうのにかなりの抵抗があった。

ほら、もし強盗が入ってきたら即効見つかるでしょ。一応あたしも乙女ですから、身の危険は回避したい訳ですよ。

だから寝室の手前にリビングがある部屋を選んだ。いざという時は寝室に逃げて、そこから外へ逃げるのだ。

まあ、ここ2階なんだけどね。

そんなこんなで3分経過、ベルはまったく起きる気配がない。

もし時差ボケで起きられないのなら無理に起こしちゃ可哀想よね

？ でも早く優花さんの行方を調べたいだろうし……。

「ああ、するべきか、否か——それが問題だ」

あたしはハムレットになりきって両手を天に向け、独り言をつぶやいた。

どうでもいい事だけど、あたしは高校の頃に演劇部でハムレット役をやられた。弟がやるはずだったハムレットを姉のあたしがやるハメになった苦い思い出。

あたしの2つ下の馬鹿な弟は、本番1週間前に足を骨折した。

あたしと喧嘩の末、家の階段から落ちたせいで——責任転嫁にも程があるって思わない？

……別に、あたしが落としたんじゃないんだからねっ！

「ん……」

そんなハムレットがソファの横に立つと、気配を察知したのだろ
うベルは、身じろぎして毛布から顔を出した。

寝癖なのかわからないけど、昨日よりも髪の毛のカールがくるく
るしている。

か、かわいいっ！

子供だったら即効で頭ナデナデしちゃうくらい触りたい髪の毛。
でもベルは大人の、それも男性。しかもあたしより1つ年上の27
歳だと聞いた。

もし年下だったらナデナデしてたかもしてない。

気を取り直して、

「おはよっ」

あたしは目を開けたベルを見下ろしながら声をかけた。

けど………あれ、無反応？

彼は天井の模様をじっと見つめて——そのまま目を瞑った。

ちよつと！

せめてあたしには気づいて欲しかったけれど……まあいいか、起
きるまで寝かせておこうかな。

そう思ったけど………思っただけだね。あたしはどうしても抗え
なかったのだ。

ちよつとだけ、ちよつと観察するだけ——だってイケメンの、そ
れも外国人をまじまじと見るチャンスなんてないもの。

あたしはそこにしゃがむとじっとベルの寝顔を見た。

そう、まさに眠れる森の王子様！

羨ましいくらい長いまつ毛、形の良い唇、艶やかな黒髪……。

あたしは無意識に、そっとカールした毛先に手をのばしていた。
思っただ通り一本一本が細くてやわらかい。

しかもなんだこのキューティクルはっ！あとで何のシャンプー

使ってるのか聞いてみよう、と心の中にメモをする。

手触りが気持ちよくて、ふと実家で飼っている黒い毛のラブラドルを思い出した。

毎朝、目覚ましが鳴る30分前にあたしの上に乗って起こしてくれた迷惑なヤツ。それがもうかわいくて重くて何より犬臭くて……あーもう実家が恋しくなっちゃったよ。

モフモフを充分堪能したところで、あたしはそっと立ち上がった。

ちゃんと起こさないようにそっと髪から手を離したと思ったのよ？ けれど、急にベルの腕が伸びてきてあたしの腕を掴んだ。

やばい、起こしちゃった！

「ごめん、つい——わっ」

でもその先は言えなかった。

ベルにぐいと腕を引かれて、あたしはソファに転がされた。知らないうちにごろんと回転していて、気づいたら目線は天井。

あれ、と思うまもなくあたしの上にはベルがいた。心地よい重さにのしかかられてほんの一瞬だけ息が詰まる。

でも重くないのはベルが腕で自分の体重を支えていたから。

彼は起きてるんだか寝てるんだかわからないような、とろんとした目であたしを見ていた。

「ユーカ……」

「ちょ、ちょ……」

ちよつと待つてエー！

力いっぱいベルの胸を押して離そうとするけど、あたしの力じゃ全然ムリ、びくともしない。

これは——非常にマズイ！

「ねえ、あたし優花さんじゃないからっ！」

けれどベルは自分の胸にあてがわれたあたしの手を握って離すと、そつと手首の動脈に口付け、邪魔するなと言わんばかりにそのまま腕をソファに押さえ込んだ。

そして——あたしの鎖骨に唇を這わせはじめ。

「やつ、ベル……！」

香水の匂いが鼻腔をくすぐり、言いようのない高揚感が全身を駆け巡る。

だ、だめ……。

「あ、あのっベル！」

「しーっ」

ベルは人差し指であたしの唇に触れた。

思わず黙ってしまったあたしを見つめると、その顔を……唇を近づける。

キスされる——そう思った瞬間、あたしは顔を背けた。

腕も身体も押さえられたあたしが唯一動くのが顔だけだったし、もうそれしか逃げ道がなかったから。

どうしよう、どうしよう！ と慌てるあたしの頬に、ちゅつとやわらかい感触を感じた。

ギャーーーーー！！

あたしは心の中で叫んだ。多分、本当に叫んではないと思う……。

「ア、アゲハ！？」

不意に軽くなって、ベルがあたしの上から飛び退いたのだとわかった。

あたしも急いでソファから起き上がる。

心臓がばくばくと音を立てて肋骨を叩き、アドレナリンがハンパないくらい放出して身体中を駆け巡っている。

ベルはイタリア語で何かを呟くと、日本語で謝ってきた。

「ご、ごめんアゲハ、本当にごめん！」

ベルは顔面蒼白だ。

「だ、だ、だいじょぶ……」

未遂だったから——ほっぺチューは未遂でしょ？

「夢を見ていて、寝ぼけてしまって……ああ僕はなんて事を！」

ベルは両手で頭を抱え、可哀想になるくらい取り乱していた。

「いや、あたしが悪いの、起きたのになって思ってた……」

あれ、襲われたあたしがフォローするって……なんかおかしくない？　じゃなくって、この場合勝手に近づいたあたしが悪いのよね。

「だからほんと、全然気にしないで！」

しかもあたし、ベルに比べればまだ冷静だ。

「僕は何かした？　アゲハを傷つけた？」

顔を向けて心配そうに見つめるベルと目があつた。

「うん、何にも——」

あたしは無意識にベルの唇が辿った鎖骨を撫でていた。抵抗してもどうにもできなかった。

おとこのひとの——つよいちから。

不意に、あの瞬間に感じた熱を帯びた唇を、耳元にかかった熱い吐息を思い出す。

顔がカーッと熱くなるのが自分でもわかった。

少し落ち着いたはずの心拍数が急上昇し始める。

「アゲハ……？」

「ううん、何も、何もされてないから！　ホントに！」

ちよつと血液が沸点超えそうだっただけ。あと心臓が壊れるくらいドキドキしっぱなしなだけ。

そしてそれはまだ、現在進行形なわけ——。

いい加減もう止まって心臓！　いや、止まっちゃヤバイ。

あたしも思ってたより冷静じゃないのかも……。

何でシャツ着てないの！ 何で上半身裸なの？ 外国人はみんなそうなの？ とか思いながら、あたしはキツチンでコーヒーマーカ―のボタンを押した。

平常心……平常心よ、アゲハ。

背後ではベルがゴソゴソと着替えている。チラ見したい衝動をなんとか堪えて、あたしはコーヒーマーカーから滴り落ちる黒い液体に集中した。

あんなの弟と一緒にしよう。

あの割れた腹筋も、細いのに逞しい上腕二頭筋も弟と同じ。腕相撲では勝てなくてチヨコケーキを奪われ続けたあの忌々しい上腕二頭筋。

あたしはいつも負けてモンブランかショートケーキだった。チヨコケーキが食べたかったのに。

そもそも何でいつもおやつの取り合いは腕相撲だったんだろう？ そんなのあたしが不利じゃない？

どうでもいい疑問があたしの脳裏を過ぎった。まあいいわ、過去は振り返らない——それが深山揚羽。

オーケー、よし、その調子！

決して「あの腕に腕枕してもらいたあい」なんて思っちゃいない！ ちらつと横目で見てみる。だってあたしはもう仏のように穏やかなココロだったから。

ベルはまだ着替え途中だった。

頭にすっぽりとかぶったシャツの裾から腹筋が見えて、ベルトで締めていないジーンズが腰からずり落ちそうで、その先は――。

ベルが視線に気づいて振り向く前に、あたしは勢いよく顔を戻した。

違う……全然弟と違う。

もう、ダメ……！

朝食の準備をしながらもあたしはしばらく拳動不審で、何も無い所で躓^{つまづ}いたり壁との間合いが取れずに肩や膝をぶついたりして、その度にベルは驚いた顔を向けた。

誰のせいよっ！

コーヒーとトーストで軽い朝食を済ませた後で、あたしは早速アパートの管理会社に電話した。まあ、やはりというか、即答で個人情報はお伝えできませんと言われた。

隣で耳を澄まして聞いていたベルの落胆の色が見えて、普段はあまりしないんだけど、あたしは食い下がって聞いてみる。

「なんとかなりませんか？ 真田優花さんの友達が訪ねて来たんです。連絡が取れなくてとても困っているんです」

「申し訳ございませんが……」

「じゃあ、こちらの電話番号を教えて下さって結構ですので、連絡頂けるようお願いして欲しいのですか？」

「申し訳ございませんが——」

その台詞、20回目だぞ！ もう、いい加減折れてよね！

ちなみにあたしの「なんとかなりませんか」云々も同じくらい言ったハズ。

「わかりました、どうも！」

イライラした口調になったのはしょうがない。あたしは携帯の通話オフボタンを連打して切った。固定電話だったら受話器をガシャンと投げていたところだ。ちなみにこの部屋に固定電話は引いていない。

「ダメだった！」

携帯から相手の声が漏れていたからある程度は聞こえていただろうけど、あたしはベルに優花さんの情報が得られなかった事を告げた。

「そうみたいだね……」

肩を落としてそう呟くベルを見ていたら、どうしてもなんとかしてあげたくなってしまう。なんて言うのこれ、母性本能をくすぐるっていう感じ？

ああ、もうっ！

「次、大家さんの所！」

さあベルナルド、ヘコんでる場合じゃないわよ！ 愛しのシンデレラを探すんでしよう！

——そして、あたしとベルは、池袋のサンシャインシティに向かった。

なんでこんなデートスポットにいるかつて？

話は長くなるんだけどね、大家さんの所にいったら、あらあら彼氏？ という話から始まって、寿退社の話とか、英語喋れるの？

あらイタリア語だったわねウフフ……とか、あたしが無駄に心配していた事柄をつらつらと並べ語られ……やっと誤解を解いてあたしが前住民の事を尋ねたら、大家さんはこう言った。

「知らないわねえ、でも池袋のサンシャインなんとかの、なんとかってお店でアルバイトしているって言うってたわよ？」

その話を聞き出すまでに30分かかったという事は言うまでもない……。

そんなこんなであたし達はここにいます。

しかもめっちゃくちや居心地が悪い。だってすれ違う人みんな、あたしが連れてる外国人を盗み見て次にあたしをちら見する。その後はフーン……といった表情になる。

なんか、腹立つんですけど。

ジーンズに黒のテラードジャケットを着ただけの恰好なのに、ベルはモデルみたいにカッコイイ。ジーンズのポケットに親指だけ突っ込んで信号待ちをしているその姿は、まるでカメラを意識して

佇んでいるみたい。

ちなみに、横にいるあたしは同じくジーンズにカーキのブルゾン。それと使用感のあるCOACHのバッグ。

うーん、普通過ぎる……せめてかわいいスカートかセクシーなシヨートパンツにすべきだったかしら？　そしたらベルと並んで歩いても違和感ない？

「信号が変わったよ？」

シヨーウィンドウのガラス窓に映った自分の姿を眺めていたらベルに声をかけられた。

ベルはあたしの目線を追ってガラス窓を見ると、そのガラス越しにあたしと視線を合わせる。

「え？　ああゴメン！」

あたしは急いで横断歩道に向き直ると大股で渡りはじめた。

ガラスに映った自分を眺めている姿を他人に気付かれる事ほど、恥ずかしいものはない。

だって「この人、自分の姿見て自分イケてる！　って思ってるんだろうな」って思われてるでしょ、絶対。

あたしハズカシー！

人を掻き分けてやっとサンシャインシティに辿り着いたあたしとベルは、名前しか知らない女性を探すため、エスカレーターを下りて地下へ向かった。

雑貨屋、服屋と端から順番に店に入っては出てを繰り返す。

きつとどこかのお店で「真田優花は私です」って名乗りでてくれるシンデレラを捜し求めて。

ベルは期待に胸を膨らませて、店に入る度にキョロキョロと店員さんを眺めていた。目が合った女性は、もれなく全員ドキッとしているハズ。

そして、王子の従者であるあたしはこう言うのだ――。

「すみません、こちらで真田優花さんって方は働いていますか？」
地下1階、地上1階と回って、只今2階の高級そうなアクセサリ
ー店なう。

「はあ……少々お待ちください」

いらっしやいませ、と愛想よく声を掛けてくれた店員さんがベル
に目を向けて頬を染めた後、あたしの質問に首を傾げて奥へと消え
る。

ちょっと待っても戻って来ず、暇を持て余したあたしはガラスの
ショーケースにあるアクセサリを眺めた。

「あ、かわいいー」

最近、アクセサリ買っていないなあ。むしろこういったものはプ
レゼントして欲しいけど……。

「よかつたらお試しになりますか？」

物欲しそうに見ていたかしら……？ 別の店員さんに声を掛けら
れた。

「あ、いえ、大丈夫です……」

「どれみてたの？」

やんわりと断ったらいつの間にかベルが隣に現れる。

店員はニコニコしながらショーケースからネックレスを取り出し
た。

素材はフェミニンなピンクゴールドでバラのモチーフ。中心にあ
る赤い宝石は多分ルビーだ。

値段的にキュービツクジルコニアじゃないと推測。

「宝石はルビーなんですよ」

ほらビンゴ！

「本当だ、かわいいね」

「彼女さんにお似合いだと思いますよ？」

「うん、きつと似合うだろうな……」

小さなバラを手に微笑むベルのその顔が幸せそうで、多分優花さ
んを思い描いているんだと思った。

あたしだってこういったカワイイものを見れば、かわいっ！っ
て思う。

けれど、実際似合うかって言うと180度別次元。

弟がいるせいかな、あたしは少々ガサツらしいから。もしも優花さんが見つかったらイイ男に好かれる秘訣を聞いてみようと思っただけ
れど、聞いたところで実践できるかって考えたらちよつと無理な気が
してきたぞ。

「お客様、お待たせしました」

おっと、最初に尋ねた店員さんが戻ってきたみたい。

「申し訳ございません、当店ではそういったスタッフはおりません」

「あ、そうですか……わざわざすみません、ありがとうございます
まし
た」

頭を下げる店員さんに、あたしも同じくぺコリと頭を下げた。

正直ここまでわかっていればシンデレラはすぐ見つかると思っ
た。

しかも、ロールプレイングゲームの冒険みたいでちょっとワクワク
しちやってた。ほら、村人に聞いてヒントを得てさ、少しずつ目
的に近づくってヤツ。

それからあたし自身、男性と二人きりで出歩くという行動も久方
振りで、デートみたい！って少し調子に乗って服を見たりと楽し
んでしまった。

けれど、シンデレラ探しは予想以上に難航していた。

サンシャインシティの人々はゲームの登場人物のように簡単には
情報を与えてくれないのだ。

あたしがそんな質問をすると不審者扱いする店中にはあつて、
必ず冷たい視線で睨まれてスタッフの情報は教えられまんって言
われる。

ホント、現実って冷たいのね——。

「疲れたねっ！ もう足パンパン！」

「アゲハ、僕のせいで色々と歩かせてしまつてごめんね……」

「あ、いや違うの。えっと、あたしの運動不足が原因みたい！」

これだからデスクワークは嫌よね！ と苦笑いで誤魔化してみるけれどベルは眉根を寄せて微笑むだけだった。

なんとかなる！ と思つて始めたシンデレラ探しは結局なんともならなくて、ベルのガツカリした顔を見る度にあたしはなんて役不足なんだろうと感てしまい胸が苦しくなった。

自分でもどうしてこんな気持ちになるのかわからないから厄介だ……。

「とりあえず何か食べよう！ お腹すいてちゃ良い案も思いつかないし、ね！」

ここはサンシャインシティの上階にある夜景の見えるイタリアンレストラン。

けれどあたし達は夜景の见えない席で向かい合つて座つた。夜景を見るためには予約が必要なのだ。

静かな雰囲気、小さめの音量でクラシックともジャズともいえないミュージックが流れている。けれど高級なレストランではない。

うん、こういうお店好きだな……恋人同士で来たりしたらもう最高なんだけれど、ね。

「あたし海老のクリームパスタにしようかなあ。ベルは？」

「うーん、メニューが半分くらい読めないみたいだ」

「え、そうなの——つてそうよね、ずっと一緒にいて全然気づかなかった！」

「アゲハ、読んでくれる？」

気付かせないなんてすごいだろ？ と言いたげな、いたずらっぽ

い笑みを向けられて、あたしは思わず言葉を飲み込んでからこくりと頷いた。

「なんかこの店暑いんですけど……。」

あたしは自分の見ていたものを横に置くと、ベルがテーブルの真ん中に広げたメニューに向き直る。

「えっと、じゃあ上から読むね」

漢字で書かれた野菜や具材の単語は解る範囲で英語にするとベルも理解してくれるし、カタカナ名はそのままイタリア語だった。

「僕は平仮名だけなら読めるんだ」

「へえ、日本語と平仮名は優花さんに教わったのね？」

「いや、違う。祖母が日本人なんだ」

「そうなんだ!？」

なるほど、だからあまり聞かない単語も知ってるわけだわ。「性急」とか、一瞬頭の中で漢字を探しちゃったわよ。え、請求? みたいなの。

それに他の外国人ほど近寄りたがりな雰囲気を感じられなかったのも4分の1が日本人だったからかも。「同じ日本人」という接点が一つ見つかった気がしてあたしは無性に嬉しくなる。

「日本語と平仮名は小さい頃に教わった。けどカンジはフクザツで難しいね」

苦笑いで微笑むベルの顔があまりにも近くて、あたしは不覚にもドキリとしてしまった。この笑顔は重罪でしょう……。

「えっと、あとは——ワインは飲む？」

急いでベルから視線を外してあたしはメニューのページをめくる。ベルがテーブルに乗り出すと、風が生まれてふわりと香水の匂いが届いた。瞬時にあの時の——押し倒された時の記憶が蘇って、あたしは思わずのけ反った。

「どうしたの？」

「な、なんでもない!」

ベルの存在を意識してしまい、しかもこんな乙女的な過剰反応を

する自分にも驚いて、余計にドキドキした。お、落ち着け、あたし！

「はい、アゲハ」

デザートを運んできたウェ이터がその場を離れると、ベルは小さな箱をポケットから取り出してテーブルの上にトンと置いた。

ベルと最初に出会った時に見た、指輪が入っていたような小箱。それを指で押してあたしの方へ滑らせる。

普通なら、わぁプレゼント！ って期待するんだけど、今回ばかりはそれは有り得ないとわかっていた。あたしそこまでおめでたくないもんね。

「開けてみて」

ベルは青い瞳を細め、とろけそうな笑顔を浮かべている。

「何でそんなにニヤニヤしてるのよ？」

「いいからいいから」

あたしは不思議に思いながら蓋を開けた。優花さんへのプレゼントをあたしに見せて、ノロケ話でも始める気か？ って構えながら中身は今日見たバラのネックレス。

一緒にいたのに気付かなかった……いつのまに買ったの？

「あのネックレスね、やっぱりかわいいなあ。これがどうしたの？」

「付けてみて。きつと似合うと思うから」

はい——？

「え？ あ、あたしに？ あたしが付けていいの？」

あたしはそう言われるまで優花さんへのプレゼントだと思っていた。間違っても自分宛てだなんて——まあ、普通は思わない。

だから余計に驚いた。しかも声が大きすぎて、いい雰囲気だったらしい隣の席から、チラッと視線が突き刺さる。

「それ、かわいいって言ってたから……」

突然の出来事に戸惑ってネックレスを見つめながら硬直していたら、ベルはそう言った。

確かにかわいいって言ったけど……。

「あの……あ、あ、ありがとう」

聞こえるか聞こえないくらいの、か細い声であたしは呟いた。だつて脳内はこれ以上にないくらい大パニックだったから。うわあ、ほんとに？ あたしが貰つていいの？

期待していなかったサプライズプレゼントほど嬉しいものはない。女性なら大好物でしょう？

それが恋人でなくても。ちょっといいな、って思つてる人だったらなおさら嬉しい。

あたしはおずおずとチェーンをはずして首にかけてみた。

鏡がないから自分では似合っているかどうか解らないけれど……でもこういうかわいいのは似合わないって自分が一番理解している。

付けてみたけどどうにも気恥しくて、ちらつと目線だけでベルを見たら、彼はワイングラスを片手に頬づえをついてあたしを見ていた。

「うん。アゲハ、やっぱりかわいい」

熱い瞳で恍惚と魅入るベルの視線があたしの胸元に絡みつき、それからゆっくりと視線を合わせてくる。

カワイイと面と向かつて言われたからなのか、それとも別の何かが原因で、あたしの顔からボロボロと高熱が発生した。

ゆっくりとワイングラスを傾けるベルの動作から目が離せない。

このふわふわとした感覚はなに？ あたしもうワインに酔っているの？

ベルは、ひよつとしてあたしに恋愛感情を抱いている？ まさか

……そんな事は有り得ない。ベルは会った事もない女性を愛しているのだから。

あたしなんか一目惚れするはずなんかない。

目の前のワイングラスを手にとると、あたしはぐいっと飲み干した。

お願いだからそんな笑顔向けなくて……あたしの事好きなのかもって期待しそうになるから――。

どうにか心にブレーキをかけると火照った顔から熱が引いて、あたしはやっと冷静を取り戻した。

ベルは――好きになってはいけない人なのよ。好きになった所で失恋確定なのだから……。

「あたし、あまり女の子っぽいアクセサリーって似合わないのよね……」

嬉しいという感情を思い切り出したいのに、恥ずかしくて、照れくさくて――ううん、そんな感情を彼の前では出してはいけない気がして、沈黙を破ってあたしの口から出た言葉は否定的なものだった。

ベルの顔からさっと笑顔が消える。

あたしはその瞬間にしまったと思った。せつかく贈ったプレゼントを喜ばれもせず似合わない、なんて言われたら嫌な思いをするのは明白だ。

本当はこんなに嬉しいのに……もうどうしていいか解らない！けれど口から出てしまった言葉はもう元に戻せない。いたたまれなくなつて、あたしは視線を下に向けた。

――もう消えてしまいたいと思いつつながら。

テーブルの上で組んでいたあたしの両手に、ベルの温かい手がそつと重ねられた。

あたしはびくりと顔を上げる。

「アゲハはかわいいよ。どうしてそんな事を言うの？」

沈静化したはずの熱が触れた手と、身体の中から一気に蘇ってくる。

「あ、あのね……ほら、あたしこんなかわいくない性格でしょ。良

く言われるのよ。ガサツだとか、可愛げがないとかって……」

あまり生き恥を晒すのは得策じゃないと思いながらも口から出る言葉は止まらない。

「多分弟がいるからなんだけど……ううん、それはただの言い訳で

——」

「誰がそんな事言ったの？ アゲハはともかわいいよ。優しくて思いやりがあつて——素敵な女性だ」

あたしの言葉を遮って言うベルの言葉があまりにも温かくて、心地よくて……だからあたしはなぜかわからないけれど涙が出そうになった。

「あ、ありがとう。そう言ってくれと……すごく嬉しい」

どうにか絞り出したあたしの小さな呟き声を聞いて、ベルはふわりと微笑んだ。

今まで見た中で最高の笑顔……。

今さらながらに気付いた——あたし、もうすでに恋に落ちている。こんな気持ちは初めてで、なんて説明したらいいのかわからないけれど、でもわかる。自分の気持ちに嘘が吐けない。

あたしベルナルドが好きだ。

(前書き)

恋とはどんなものかしら。

あなたがもし知っているのなら、どうか私に教えて欲しい。

この胸に渦巻いているのが恋心なのか、それとも別のものなのかを、教えて欲しい。

うつとりするほどの熱い思い……私にとっては初めての経験で、本当によくわからないの。

私の心の中にはとても愛おしくて眩しい思いがある。

ふわふわのわたあめのような甘さだったり、かと思えばたまらなくほろ苦いビターチョコレートのようなもので。

ぎゅっと胸が締め付けられて息ができないと思った瞬間、身体の内側からぽつと生まれる熱い思いで胸が高鳴る。

けれど、すぐにまた私の心は揺らいで不安でいっぱいになってしまふ。

私はこの気持ちはどうにかしてほしくて、誰かに助けを求めたいのだけれど、でもどうすればいいのかわからない……。

ため息を吐いて、へこんで、弱音も吐いて……もう諦める？　って思っ——ううん、気付けばもうすでに心を奪われているんだ。

いつもいつも、その笑顔に振り回されてドキドキして落ち着かなくて——でもこんな日常が、実は嬉しくて、楽しくて、安息感に満ち溢れているんだって私は知ってる。

もう知ってしまったの。

恋とはどんなものかしら。

あなたがもし知っているのなら、お願いだから私に教えて。
この胸に溢れる想いが愛なのか、それとも別のものなのか――。

モーツァルト 『フィガロの結婚』 より
く 恋とはどんなものかし
らく

（別名：恋の悩みを知る君は）

（後書き）

サブタイトルに使ったアリアの和訳ですが、直訳すると全然ちがうので、その点はフィクションとしてご了承ください。

ジリリリリリリ——

携帯のアラームが耳元で鳴り響いて、あたしは思わず飛び起きた。

「やばい、遅刻!？」

ほっ、いつもの時間だ。

窓の外からはチュンチュンと小鳥の鳴き声が聞こえてきて、ああ地獄の月曜日が来てしまったか——と、いつもなら嘆息するところなんだけど……。今朝はいつもの月曜日じゃないんだ、と思い出すと睡魔が一瞬にして霧散した。

耳を澄ますとキッチンからジュージューとフライパンで何かを焼く音に加えて、食器を置く音、水の流れる音が聞こえてくる。

リビングへと続く戸を開けようとしてはたと気付く。

「やつぱり先に着替えを済ますべきよね？」

朝一でトイレに行きたいのを我慢しながら、クローゼットから黒とベージュの色合いの服を引っ張り出して素早く着替える。平日用のオフィスカジュアルは地味なものばかりなのだ。

そつと戸を開けるとベーコンとコーヒーの香りが届いてくる。いい香り。

「おはよう、アゲハ」

「お、おはよっ!」

アゲハとベルナルドの正式(?)な同棲生活一日目——ただしあたし達は恋人同士ではない微妙なカンケイで……。

「顔だけ出して何やってるの? もうすぐできるよ」

ベルは軽々とフライパンを振ってスクランブルエッグを作っている。

あたしの朝食。

何食べたい、と聞かれたから昨夜のうちにリクエストしておいたのだ。

土曜の夜、レストランであたしが恋心を意識して……そして挙動不審でトイレに立って戻ると、ベルは自分のアメリカンエキスプレスで支払いを済ませた後だった。

「やだ、あたしが出すのに！」

ここ行ってみたい、って言ったのはあたしだったから、マナーとして支払いはおたしがしようと思っていた。もしもベルの中に渦巻く男のプライドがしゃしゃり出てくるのなら、割り勘にしようと思って考えていたのに。

いつもならラッキーって思うけど、会社関係の飲み会や上司のオゴリとは訳が違う。

「ねえ、いくらだったの？ 半分出すから——」

「いいんだ、これはお礼だから気にしないで。今日一日付き合ってくれてありがとう、アゲハ」

ネックレスまで貰っておいて、その上ディナーまで奢らせてしまった。普段なら嬉しいはずなのに……ああもうっ！ この胸のモヤモヤはどうしたらいいの？

これ以上しつこく支払いに固執するのも可愛げがない気がして、あたしは早々に折れた。この笑顔を消してまで割り勘にしたくはないでしょう？

「あの、じゃあ……ご馳走様でした」

こんな事になるのならあんなに飲むんじゃないかった、とかなり後悔。全然遠慮しないでお酒のお代わり頼じゃってたから……。

ベルはあたしの後ろに回ると、椅子にかけておいたあたしの上着を手に持った。何をしているんだろうと不思議に思っていたら、「どうぞ」と袖を通しやすいように広げてくれた。

どうやら着せてくれるらしい。

ちよ……こんなことされたのお店で試着する時くらいなんですけど！

「あ、ありがと。やさしいね……」

そう言つと背後でふつと笑いが漏れ聞こえて、あたしはどうしようもなくドキドキしてしまった。

その後もベルは高度なレベルのレディファーストであたしをお姫様扱いした。レストランの重厚な出入扉を開けて押さえてくれたり、エレベーターの扉が閉まらないように手で押さえてくれていたり。

そういえば、朝から色々と氣遣つてくれたのだと今さらながらに気付いた。なぜ今頃かつて？ そりやもうあの一件から隣に立つベルを意識しちやつてたからですよ……。

エスカレーターや階段でもあたしは自然に誘導されていたのだ。足を滑らせてもベルが支えてくれる位置に……。

少し前を歩いていたベルがいつの間にか後ろにいて、あたしはアレ？ と思つたけどあまり深くは考えていなかった。

まったく気付かせない心遣い。これが紳士というものか！ なにこれスゴくない？

じつと横顔を見ていたら、気付いたベルがあたしを振りむいてにっこりと微笑んだ。何見てるの？ とか、何の用？ とか尋ねずに「あの、えつと……そうだ、明日はどうしようか？ どこを探す？」

無言のエレベーター内に流れる甘いような、そうでないような空気にドキドキしながらあたしは口を開いた。

「明日はもう一度このあたりを探してみるよ。何か見逃してしまつたかもしれないし」

「そうね……」

じゃあ、明日はサンシャイン通りを搜索してみようかな、と頭の中で計画を立てた。大家さんの言つたサンシャインなんか、が「シティ」じゃなくて「通り」かもしれないし。サンシャイン60通りの可能性もあるよね。サンシャインなんかって思ったより結構ある。

ポーンとエレベーターが1階に到着した事を告げた。

ベルは当たり前のように扉を押さえてあたしが出るのを待っている。「開」ボタンを押しながら扉を押さえているのだ。高級デパートのエレベーターガールかつてくらい丁寧。

優しい心遣いがありがとう、とお礼を言おうとしたらベルが先に口を開いた。

「だからアゲハ、今日は付き合ってくれてありがとう」

「え？ あ、うん……」

その言葉にあたしの心はひやりとした。

「もう迷惑はかけられないし、明日は一人で探してみるよ」

あいしてる——と言いそうな表情でベルは囁く。

「いいのよ、別にそんな……」

ちよつと待つて、どうしてそんなコト言つの？ もうあたしは必要ないってこと？

「こちらこそごめんね、あたしあまり役に立たなくて……」

「充分だよ、ありがとう」

だから、もうこれでサヨナラ——？

エレベーターから降りて一番近い出口へと向かう。

あたし、ベルの連絡先も知らない。苗字だって知らない。

それなのに、もう終わりなの？

……何も知らない。まだ何も教えてもらってない——聞きたい事がたくさんある。

「ベル、もう一度あたしにチャンスをちょうだい！」

立ち止まって勢いよく振り返ると、あたしに追いつこうと早足で歩いてきたベルとぶつかりそうになった。

どうやらあたし、エレベーターを降りてから早歩きだったらしい。

「え、チャンス？」

あたしの言葉が、それとも急に立ち止まった事に対してなのか、ベルは驚いた表情で聞き返した。

「優花さんを一緒に探そう！ あたし役立たずかもしれないけど……でもほら、あたしは漢字が読めるし。日本って意外と漢字だらけ

よ？　ウチにも見つかるまで泊まっていいいし。っていうか、あそこを拠点に探した方が効率がいいと思うの」

あたしは思ったままを口に出して一気にまくしたてる。

「乗りかかった船だもの。ここであたしだけ下りるなんて、なんか悔しいじゃない！」

ベルは静かな表情であたしの話を聞いていた。

どうやってこの提案を断ろうか——というような思案顔に見えて、あたしの勢いは急激に失速し始めた。

確かに大きなお世話かもしれないけど……。

「だからお願い、協力させてよ」

最後は自分のつま先に向かって言葉を落とした。

懇願するような声音こわねになっていると自分でも気づいた。でも、これでサヨナラなんて——あたしは絶対に嫌だっと思ったんだ。

好きになつた途端失恋が確定していても、あたしはもつとベルの事が知りたい。この想いは止められないって確信してしまった。

閉店してシャッターの下りた静かな通路に重く冷たい沈黙が流れる。

「アゲハ……」

ふわりと空気が揺れてベルにそつと手を握られた。温かくて大きい男の人の掌に、あたしの両手はすっぽりと包まれる。

「ありがとう。本当に申し訳ないけど……しばらくご厄介になります」

「ベル……」

頭上から降ってきた言葉に顔をあげると、ベルはやわらかい笑みを浮かべていた。

「祖母の言つたとおりだ。日本人はみんな親切だね」
うっ。

正直に言うけど——最後の台詞にはグサつときた。でもいいの、これは親切心からの提案なんだとあたしは自分に言い聞かせる。
下心なんて……微塵もないんだからね！

そんなこんなで日曜日も池袋デート……もといシンデレラ探しをしたけれど、結果は実を結ばなかったのだ。

そして今に至る——という訳で。

「わあ、すごいっ!」

洗面所で顔を洗ってメイクをして戻ると、猫足テーブルにフレンチトースト、スクランブルエッグとこんがりベーコン、しかもサラダまで用意してある。

「冷蔵庫の物勝手に使ったけど問題なかった?」

薫り立つコーヒーの入ったマグカップを2つ手に持ったベルが片方を手渡してくれた。

「うん全然問題ない!」

むしろすごいと思う。料理の得意な男性ってポイント高いよね! 家賃と水道光熱費は貰わないからね! とつっぱねたあたしの決意に溢れているであろう表情を見て、ベルは外国人特有の「お手上げです」ジェスチャーをすると、代わりに食事を作ると事を申し出てくれた。

初めて会ったあの日、あたしはコンビ二弁当が夕飯だったから、いつもそれを食べていると思ったらしい。あたしは焦って、いつもはそんな事ないのよ、自分でも作るのよ! と訂正したのだけども……。

「キッチンが綺麗だったからとても使いやすかったよ。フライパンも使っていないんじゃないかってくらいピカピカだ」

そう言って口元を綻はくばせるベルに、あたしは引きつった笑顔を向ける。

「あ、うん……引越したばかりだから、あまり使っていないのよね」
なんか、料理してる形跡がないよ? って聞こえた気がした。

「これ合鍵、外出するならちゃんと締めてね。何かあったらあたしの

携帯に電話かメールして」

ハイ、と鈴が付いた鍵をベルに手渡す。

「わかった」

「携帯の使い方はもう大丈夫よね？」

「大丈夫！」

ベルは携帯をポケットから取り出した。日本にいる間、不便だからと用意したもの。

「一人で探しに行くのは止めないけど……迷子にはならないでね」

「子供じゃないんだから心配しないでよ」

困ったように微笑むベルにあたしの胸は勝手にキュン、ときめいた。

「そ、それから火の元には注意してね。あとあたしの部屋には入っちゃだめよ！」

「……そう言われると入りなくなっちゃうね」

いたずらっぽく笑うベルに、あたしもぷつと吹き出した。

いいなあ、こんな雰囲気。好きな人と同棲したらきつと楽しいんだろうな。

「じゃあ……いつてきます！」

「いつてらっしゃい」

ベルはあたしのためにドアを押さえてくれていて、だからあたしはもう一度振り返った。

本当の恋人同士だったらきつとここでキス――。

でもあたしとベルにそんな関係じゃないからキスはなし。手を振って送ってくれたので、あたしもおずおずと手を振りかえた。

こういうのっていいよね、ほんとに同棲してるみたいで嫌な出勤もウキウキしてしまう。

でも唯一残念な点は――あたしの一方通行な片思いだって事。

ベルは今頃何をしているんだろう？ メール送ってみようかな……
…つて、あたし仕事だし。ダメダメ！

「3名分です、交通費お願いします」

あたしは2階の経理部にいた。

交通費の請求も忙しい営業担当の代わりにやらなければならないのだ。

たまにパタパタと心がベルの元へと飛んで行きたがりついボーっ
としてしまう。まだ午前10時なのに、よくない兆候だって自分
も感じてる。

フォーリンラブ……恋に落ちるってこうなるのか。

「受理しました。また午後に取りに来て下さいね——あ、待つて深山さん！」

あたしは呼び止められて振り返った。

「悪いんだけど、アレ持つていつてくれる？ 上期の無駄な費用を
洗い出したいって言われて4月からの請求書関係の資料、倉庫から
持つて来たんだけど、おたくの渡辺部長がなかなか取りに来てく
れないのよね」

いい加減邪魔なのよ、と顎で示されて、あたしは隅にある段ボ
ール箱へと近づいた。中には厚み10センチ程のファイルが5冊。

「はあ、解りました……」

これ、めちやくちや重そうなんですけど……。

でも経理部のお局様に逆らえるほどあたしはこの会社では偉く
ない。

よいしょ、と持ち上げると、ずしりと腕に重みがかかった。

う、腕が死ぬ！

「こういうのって男の人が持つべきじゃない？」

よろよろと経理部を出て誰にも聞こえない所まで来るとあたしは

ひとり呟いた。

しかもこれじゃエレベーターの「上」ボタンが押せないじゃない。一度床に置くのも腰に負担がかかるから、あたしは段ボールを持ってたまま、つま先を伸ばして少しずつ腕を上げる。けれどボタンを押す前にエレベーターが空いて人が降りてきた。ラッキー。

足早に降りる人を待ってから、あたしはふらふらしながら乗り込んだ。

「ぎゃあ！」

けれど「開」ボタンを押していないエレベーターは自然に閉まってあたしを挟んだのだ。

もう、朝からひどすぎると思わない？

「今日の乙女座は2位だったのになあ」

誰かが押し間違えたのか、営業部のある5階のランプが付いていたので、ここでは無理して手を伸ばす事なく済んだ。これは乙女座の幸運？

「おはよう、ちょうちょちゃん。朝からエレベーターとじゃれあうなんて元気だねえ」

不意に背後から話しかけられてあたしは驚いた。

「げっ、吉野さん！ おはようございます……」

後ろの方で気だるそうに壁に寄りかかる人物は同じ営業部の吉野樹^{つき}さん。

「なんだその嫌そうな顔は……」

「いえ、別に——っていうか、いるならエレベーター開けておいてくださいよ」

「寝てたんだ。でもちょうちょちゃんが騒ぐから目が覚めた」

吉野さんは眠そうに目を細めてあたしを見ている。

なんなのよ、その言い訳は……。

あたしの事を「ちょうちょちゃん」なんて子供みたいなあだ名——しかも言いにくいだろうに——で呼ぶこの人は、同じ営業部の営

業担当で、あたしの4つ先輩の30歳。ちなみに独身・彼女ナシ。これはあたしのリサーチじゃなくて後輩の舞子ちゃんから。

そして黒に近いダークグレー……スーツの色じゃなくて性格がね。

今日のスーツは黒地に白のストライプ。皺ひとつないバーバリーブラックレーベルが似合う大人のイケメンだ。

仕事に関しては鬼のように厳しくて、あたしが新人だった頃、めちゃくちゃ怒られまくったという苦い思い出がある。半泣きで納品書を作りなおした事は今でも鮮明に覚えてる。

お陰でまあまあ使える人間に成長した今のあたしがいるんだけどね。でも……ぶっちゃけ苦手な人物だ。

「それ、重そうだね」

今さらながらにあたしの持っている段ボールに気付くと問いかけてきた。

「渡辺部長が使っらしいです。すごい重くて腕がちぎれそうなんです、今！ ものすごーく！」

「ふうん……」

やっぱりね！ 持ってくれないって思ってた。こういう人なんだ。「別に期待なんかしてないですよーだ」

「……聞こえてるよ」

だって聞こえるように言っただもん。

吉野さんは基本イジワルだ。

でも何故かあたし以外の女の子には笑顔を絶やさない優しいフェミニスト。だから人気もあって、結婚したい男ナンバー1なのだ。

確かにこんなイケメンに笑顔を向けられたら、あたしだってうれしくなく皆と同意見なんだろうけど——本当はすごく横柄で優しくなくてオレ様でイジワルなんですよ——って声を大にして言いふらしたい。どうして吉野さんはあたしに対してだけ本性をぶつけてくるかって？ まあ、心当たりがないわけではない。

あたしこの人に嫌われてるんだ——4年前に納品書の数字を一桁

間違えたっただけで。

その件で吉野さんは顧客に頭を下げに行つて、あたしは皆の前で怒鳴られた。恥ずかしい話だけど、あたしは会社で号泣して――ああ、もう思い出したくない……。

とにかく営業部に配属が決まった時、すでに同期の間でイケメンだと噂になっていた吉野さんと同じ部署だなんてずるいつて羨ましがられたっけ。

確かにイケメンなのは認める。でも顔が良くても性格に問題があったらねえ。

もしあたしが吉野さんと結婚したら、間違いなく苦勞する――つて妄想済。

「今日は重役出勤ですか？ 羨ましいです」

「あのね……今日は取引先に直行したの」

吉野さんはわざとらしく眉間に皺を寄せて言った。

「あら、そうですか」

言われなくても知ってるけど。

エレベーターが5階に到着してドアが開いた。

吉野さんはニヤリと嫌な予感をさせる笑みをあたしに向けると、先にエレベーターから降りて――あるうことが、降りる寸前で「1階」と「閉」ボタンを押したのだ！

「え、ウソ！ やだ！」

あたしの目の前でドアが静かに閉まる。

信じられない！

両手がふさがっていて「開」に手が届かないあたしは、条件反射で足を伸ばした。制服のタイトスカートの裾がピンと張る限界まで足を上げる。

「ぎゃっ！」

閉まるドアがあたしの太ももを挟んですぐに開いた。

「なにやってるの、ちょうちょちゃん」

開けたエレベーターホールで吉野さんは笑いを堪えている。

「それはこっちの台詞です！」

あたしは閉まる前にそそくさとエレベーターを降りた。

「置き去りにするなんてひどいです！　しかも1階と閉めるボタンまで押すなんて！」

憤慨するあたしを見て吉野さんは大爆笑だ。

「ちようちよちゃん、美しい御御足おみあしご馳走様」

「もうっ！」

あたしは吉野さんを置いて営業部のフロアへと向かった。

この人は、いつもこうやってあたしをからかって遊ぶんだ。全然優しくない。本当に腹立たしい人！

どさりと段ボールを置いてやっと一息ついた所に、吉野さんが何食わぬ顔をしておはよう、とやってきた。結局手伝ってくれず、しかも時間までずらしてのご登場にあたしは怒りを露わにキツと睨む。けれど胡散臭い笑顔を向けられたただだった——そう、女性社員がほう、とため息を吐いてしまうような笑顔。

でもあたしはこの笑顔の裏側を知っているから騙されないのだよ、ふふん。

「あー深山センパイやつと見つけた！ どこ行ってたんですかあ！」
同じ営業部で後輩の田中舞子ちゃんだ。

くるくる縦巻きロールであたしより背の小さい彼女は、口を尖らせて書類の束を抱えている。

「コピー機が壊れちゃったんです！ アタシ直せません」

「はいはい、ちょっと待ってね。見に行くから」

営業部には事務担当の女性が3人しかいない。その中でアイドル的存在なのが2つ年下の舞子ちゃんだ。

甘え上手で、首を傾げて上目づかいにおねだりする姿はあたしでもクラッときてしまう程の魅力の持ち主。

これで大抵の男は簡単に落ちるのだ。真似したってドン引きされるだけだから、あたしはやらないけどね。

「人がいるんだから、誰かに頼めばよかったじゃないの」

あたしは部内にいる男性陣を見渡した。

「深山センパイがいいんですっ！」

なんか知らないけどあたしは舞子ちゃんに気に入られているみたいだ。彼女が新人の頃、仕事を教えたのがあたしだったから懐かれたのかも。

頼られるのは嫌いじゃないからついつい面倒を見てしまう。舞子ちゃんは可愛い妹みたいな存在なのだ。

あたしには弟しかいないから、ずっと妹が欲しかったんだよね。
「セ・ン・パ・イ……アタシ見ちゃったんですよっ！ 超イケメン
じゃないですかセンパイのカレシさんっ！」

コピー機へと向かう途中、突然そう言われてあたしは焦った。

「はい？ え、彼氏って……いつ見たの？ 舞子ちゃんも池袋いた
の？」

やっぱり傍^{はた}からみたら恋人同士——に見えるのかな。嬉しい……
じゃなくって。

「池袋？ 違いますよ、先週の金曜日！ 残業抜け出して会社の近
くで会ってたじゃないですか、金髪で豹柄ジャケットのワイルド系
！」

……ああ、そっちね。

「センパイって草食系が好みかと思いましたけど、まさかの肉食系
カレシですか？ しかも年下じゃないですかっ！」

「そんなじゃないわよ、あれ弟だから」

何だか拍子抜け。いや、良かったと安心すべきだ。

ベルとの同棲生活はバレちゃマズい。

「だって仲良さそうに肩組んでたじゃないですか。それから何かプ
レゼントあげてましたよね？」

肩を組んで見えたのは首を締め上げられていたから。プレゼント
に見えたのは現金2万円。カツアゲされていた訳じゃなくて引ッ越
しを手伝って貰った時のお駄賃。

あの時は残業中に呼び出されて「これから飲み会だから、この前
引ッ越し手伝ったバイト代よこせよ」と2万円請求されたのだ。

「なあんだ、センパイにカレシができたのかと思ったのにっ！」

あたしがそう説明すると、舞子ちゃんはずまらないとも言っ
うな顔で呟いた。

「簡単にできたら苦労しないって——はいこれで直ったよ」

詰まっていた紙を抜いて、あたしが顔を上げると同時にコピー機
がウィーンと音を上げて再起動を始めた。

「アタシもうみんなに言いふらしちゃいましたあ。これでライバルが一人減ったと思ったのにな。アタシの天下はいつ来るんだろう」

天下？ いや、その前に、言いふらしたって——？

舞子ちゃんの台詞にあたしは一瞬言葉を失った。

「ちよつと、言いふらしたって……誰によ？」

「営業部の人たちです！ 深山センパイの秘密のカレシは年下でワイルドな肉食系って言うて——」

「ごそごと携帯を取り出すと、画面をずいと見せてきた。

「証拠写真も見せちゃいました！」

舞子ちゃんは詫びれもせず、にこにこしている。

そこには暗いながらもあたしだと分かる後姿と、金髪で背の高い派手な男の姿——間違いなく、ちゃんぼらんなあたしの弟だ。

「なんでそんなこと——」

「だって、がっかりして諦める男性社員の姿を見たかったんだもん！」

「もしかして……変な賭けでもしてるのね！？」

あたしに彼氏ができたらいくら、みたいな。失礼すぎるじゃないの！

「違いますよっ！ もう、鈍感な深山先輩にはこれ以上教えません！」

「とにかく舞子ちゃん！ 教えてくれなくてもいいから、その情報今すぐ訂正してきなさいっ！」

舞子ちゃんは「はい」とかわいらしい返事をする、コピー機から印刷された紙を持って小走りに戻って行った。途中振り返ると、コピー機ありがとうございます、とお礼を言っ

て言いふらしたって……。

もしも池袋で舞子ちゃんに会っていたら——そう思うと背筋がぞつとした。彼女が知ったら翌日は社員全員が知ることになる気がする……。

小さい会議室を陣取ってそこに資料を広げ、あたしは一人で電卓とにらめっこ中だった。

運の悪いことに渡辺部長に経理部の資料の話をしたら、光栄にも費用の洗い出しの仕事を任されたのだった。

ああもう面倒くさい！

時計を見るとちょうど午後3時だ。コーヒーでも飲みたいな。

一人なのをいい事に、両腕を伸ばしながら大きな欠伸をした時だった。

「うひゃああ！」

両頬にひゃつと冷たいモノを当てられて、あたしの心臓は跳ね上がった。

「変な悲鳴……」

振り向くと缶コーヒーを2本持った吉野さんが気配なく立っていた。

「お、驚かさないで下さいよ！」

はい、とコーヒーを渡され、あたしはお礼を言って受け取った。

コーヒーくれるなんて、どういう風の吹きまわし？

「ちようちょちゃん、いつ彼氏できたの？ 年下でワイルドなイケメンだって？」

あたしはため息一つ。

「吉野さんまでその話、信じてるんですか？」

あの後営業部のフロアに戻ると、舞子ちゃんは吉野さんにも携帯を見せていた。

しかも「本人曰く、弟だと言ってますけど、アタシはわかりませーん」などと煽^{あお}るような事を言っていて、訂正する気はないらしかった。あたしが無言で睨^{にら}んでいたら舞子ちゃんは笑って逃げて行ったけど……それに吉野さんの事だから、有り得ないって一蹴^{いっしょく}すると思ってたのに。

まったくもう！

「だからあれはですね——」

「そのネックレスは彼氏からのプレゼント？」

「えっと……」

嘘でしょ……誰も気づかなかったのに、よりによって吉野さんに気付かれた。

あたしは隠すように薔薇のネックレスに手を伸ばす。

「それ、ちようちゃんには似合ってないよ」

アゲハ、やっぱりかわいい——そう言ったベルの言葉があたしの脳裏によぎる。

「似合わないのは——わかってます！でも吉野さんには関係ないじゃないですか」

あたしだってかわいい系は似合わないってわかってる。フリフリのワンピースとか、ラビットフアーのマフラーとか、もちろんピンクゴールドのネックレスだって例外じゃない。

だからかわいって言われて、本当？　って疑う気持ちもあったけど……純粹に嬉しかった。あたしが今まで勝手に思い込んでいただけで、他の人から見たら——もしかしてあたしってかわいいのかなって……まあ、自惚れてしまった。

そんな事あるはずないよね……。

「関係なくないよ。俺ならもっと似合うもの探してプレゼントするけどね」

「関係なくなくないです！吉野さんがどんなプレゼントするかなんて知りません——」

もう誤解とか訂正とか、どうでもいい。今の台詞はただけじゃない。似合わないとかガサツだとか、あたしを馬鹿にするだけなら構わない。けれどベルの優しさや気遣いを否定されるのは嫌だ。

「どうしてそう思うの？俺、いいものプレゼントするよ？」

「どうせ空き缶とかでしょう！コーヒーご馳走様でした。もう仕事の邪魔しないでください！あと、舞子ちゃんの言ってる年下の彼氏の件は本当に弟ですから——」

そう言い放つてあたしは資料に向き直った。

「それを聞いて安心したよ。ちょうちょちゃんは年下好みかと思っ
た」

「歳は関係ありません。あたしは優しい人が好みです」

「優しい人間なんて、何考えているか一番解らないよ。ちょうちょ
ちゃんは騙されないようにね」

無視して電卓を叩き始めていたら、吉野さんはいつの間にか姿を
消していた。

「なんなのよ、もう！」

ベルは優しい人だ。けれど見え透いた嘘やお世辞を言うような人
じゃない。会って1週間も経ってないけどそれだけは自信を持って
言える。

「優しい人は相手を気遣う事をちゃんと考えてくれるんだから！」

薔薇のネックレスを貰った時、あたしは女の子なんだと認められ
た気がして嬉しかった。でも違う、こういう物は舞子ちゃんよう
な女の子を飾るのに相応^{ふさわ}しい。

男の人から見て、守ってあげたくなるような女の子――。

「これじゃ八つ当たりだ。あたし何やってんだろ……」

吉野さんの言った事は正しい。元はと言えば、薔薇のネックレス
とベルの優しい気持ちを台無しにするくらい、ガサツで可愛げがな
い自分が悪いのだ。

あたしの首元で煌々^{くわんくわん}と咲き誇る薔薇に申し訳ない思いがこみ上げ
てくる。

その後、心乱れたあたしは何度も計算ミスを連発して、その度に
小さなイライラを蓄積させていった。

今日の乙女座は2位じゃない、間違いない最下位だ。

今日は残業せずに帰ろうと思ったのに1時間も残業してしまった……。

——7じ30ふんにはいえにつきます——

ベルは平仮名しか読めないから、漢字ナシのメールを会社を出たタイミングで送ったらすぐに返事が返ってきた。

——まってるから、きをつけてかえってきて——

他愛もない返信なのに嬉しさが込み上げてきて、あたしの胸がきゅんとうずいた。

「メール保護、と」

だって、祝・初受信メールだったんだもん。これくらいしてもいいでしょ？

そしてあたしは早くベルの顔が見たくて急いで帰ったのだ。

「ただいま！」

「おかえり、アゲハ」

ベルは温かい笑顔で迎えてくれた。ただいま、に誰かのおかえり、という返事が返ってくる。

部屋が明るくて、暖かくて——帰って誰かがいるのってすごく嬉しい。

しかも……。

「いいニオイがする！」

「今日の夕飯はパエリアだよ」

パエリアという料理を家で食べるのなんて初めてだ。

「すごい！ イタリア料理ね！」

ベルは眉根を寄せて微笑んだ。

「残念、スペイン料理だ」

「あれっ」

あたし帰って早々、知ったかぶった。

「えっと、何か手伝おうか？」

神様、どうかあたしに名誉挽回のチャンスを！

「大丈夫だよ、手を洗っておいで。もうすぐできるから」

「はい……」

神様は時に非情なのよね。

洗面所に行ってあたしはあたしと視線を合わせた。鏡の中のあたしは嬉しそうにやけている。

だって、本当に嬉しいんだもん！ ベルがあたしのために夕飯を作ってくれている……。

あたしのためだけに！

こんな日がずっと続けばいいのに——という気持ちがあたしの心の中でむくむくと成長し始めようとしていた。

けれどそれを願うのはあまりにも自己中過ぎる。ベルがずっとここにいるという事は、彼が最愛の恋人に会えないという事になるのだから。

ダメよ、アゲハ。あなたは優花さんを探す手伝いをするって言っただのよ！

そう、やるべきことはただ一つ——ベルを優花さんに会わせること——そして二人を祝福することだけ。

それ以外は決して望んではいけない……。

蛇口を捻^ほって流れ出た水道水が思った以上に冷たくて、あたしの火照^ほった心が少しずつつ冷めていく。

大丈夫、目が覚めた。

あたしはもうそれ以上を望まない——。

本日の夕飯メニューは、温野菜のスープと魚介のパエリア。

「うわあ、おいしそう！」

「スペイン産のワインもあるよ。アゲハはお酒が好きだからね」

「あ、ありがとう」

やだ、もう！ 大酒飲みだっと思ってわれてる！ あたしだってしょっちゅう飲む訳じゃないんだけど。

乾杯をして、パエリアを一口。

んゝおいしい！

「で、今日は一日どうだった？」

「まあ色々と大変だった——かな」

ベルは続きを催促するように微笑んで見つめてくる。

「つまらない一日よ、聞いたって面白くないわ」

「聞きたいんだ、話して」

会社での一日なんていつもと同じで何の変化もないつまらないものだ。

しかも今日は朝から良い事なんて一つもなかった。

「アゲハの話が聞きたい……」

ベルの笑顔に負けて、あたしは朝から酷い目にあつた話を掻い摘んで話した。

その度にベルは「重い物を女性に運ばせるなんて！」とか、「アゲハは優しいから誰にでも頼られるんだね」とか相槌を入れてくれるから、正直あたしは話してるのがだんだん楽しくなってきた。最後には今日一日そんなに悪くなかったのかも？ なんて思うようにもなつてきちゃって。

我ながらなんて単純なんだろうって思った。

うつん、もしかしたらベルの魔法かもしれない。

言葉の魔法。きつとあたしの心のモヤモヤを取り除いてリラックスさせるやさしい魔法なんだ。

「——それでね、そうやっていつもあたしを苛めるの。気配がなくて本当に驚いたんだから」

「なるほどね……話を聞くに、もしかして彼はアゲハの事が好きなのではないかな？」

あたしはブロッコリーを噴出しそうになった。

吉野さんがあたしを好き？ 小学生の男の子がよくする、好きな

子は苛めちゃうってやつ？

「まさか！ やめてよベル、変な事言わないで！」

そんなの絶対に有り得ないってば！

「わからないよ、男心はフクザツなんだ」

ベルはワインを飲みながらしたり顔で言った。

「あら、そうなの？」

その言い方がおかしくてあたしもクスクス笑い出した。

吉野さんがあたしを好きだなんて、それは有り得ない事——だって、好きな人に似合わないよ、なんて失礼な事言わないでしょう？ もしろんベルには最後までネックレスの件は言わなかった。それを言えば、吉野さんはあたしの事が好きかも説を覆す事ができるかもしれないけれど……。

「あたしの話は終わり！ 次はベルの番よ」

ベルのグラスにワインを注いであたしは催促してみる。

「いいよ、実はね……」

ベルはニコニコしながらキッチンへ向かい、現れた時には可愛い色合いをした花束を手にとっていた。

「アゲハにプレゼント」

「え、ほんとに？」

ひよっとしてプロポーズ？

「今日から駅前の花屋でアルバイトを始めたんだ」

……んなわけないっつの！

わかってた、わかってたわよ。ちょっとだけキツとした事は認めるけれど。

「すごいきれい。ありがとう、ベル」

花束を貰ったのは実は初めてだ。もちろん卒業式とかそういったイベントでは後輩から貰った事くらいはあるけれど。

男性から花を贈られたのはこれが初めてだったから、それに深い意味はなくてもあたしはすごく感動した。

花をもらうつて……こんなに嬉しいんだ。

「いい香り……」

ベルにとってあたしはなんだろう。ただの友達？ ただの家主？ それとも花束を贈るくらいは友達以上に想われているって勘違いしても……いいのかな？

心のどこかで警告音が鳴り響く。これ以上は考えてはいけな——と。

「でも、どうして急にアルバイトなんて……」

「大家さんが紹介してくれたんだ。偶然会って話をしたら、人探しなら人通りの多いところですね。助言をくれてね……」

なるほど、その後は大体想像がつく。

人通りの多い駅前の花屋なら目に付くから——しかもイケメンの花屋の店員なんていたらすぐ噂は広がるもの。

顔を知ってる優花さんはベルを見つけることができるし、買い物ついでにお客さんに尋ねれば、彼女を知っている人が見つかるかもしれないって事だ。

「あとね折り入ってお願いがあつて……」

ベルは何故か申し訳なさそうに上目遣いで尋ねてきた。

「なあに？ あたしに出来る事なら何でも言つて」

「この書類にサインをしてくれないかな？ 僕は外国人だから何かあつた時のために、誰かに連絡を取れるようにしたいって言われて……」

おずおずと取り出した書類は履歴書で、示された場所は保護者欄だった。

「あ、うん……いいよ」

ベルにとって——あたしは保護者？

「ちよつと待ってね、とりあえず花を——」

その瞬間、あたしはとんでもない事態に直面している事に気づいた。

この家に花瓶というものは存在しないのだ！

えっと、代わりのもの……ペットボトル？ 牛乳パック？
どどど、どうしよう！

「僕がやるよ」

呆然と立ちすくむあたしの両手から花束をそつと引き受けると、
ベルは器用にリボンを解き始めた。

「あ、待ってベル、あのね——」

「花瓶も用意してあるから大丈夫だよ」

ベルはウインクして言った。

まるで「この家に花瓶がない事くらいお見通しさ」と言わんばかりの表情で……。

「すごく用意がいいのね……」

って言うか、花瓶がない家って——花を普段から飾らないって
事で……。

やだもつ、あたし全然女らしくないじゃないの！

「これはね、アゲハを想って束ねた花なんだよ。見て、アゲハらしいでしょう？」

ベルは透明なガラスの花瓶に花を刺しながら、どきりとするような事を言った。

でもきつと、ベルのあたしに対する感情は愛じゃなくて感謝だけだ。

誤解するな、あたし！

「そう……なんだ？」

薔薇、ガーベラ、カスミソウ。それと名前も知らない花々がキッチンカウンターで威風堂々と咲き誇っている。どれもピンクや白やオレンジなどの可愛らしい花ばかりで、どの辺があたらしいの？という疑問が脳裏をよぎった。

どうしてあたしを想ってその花を選んだのか、そもそもどうしてあたしに花束を贈ってくれたのか……。

そこに深い意味はあるのか——それともただ単に売れ残った花を貰って来ただけ？ 色々な思考が目まぐるしく生まれては消え、を繰り返す。

直接聞けばハッキリするのだけど、あたしはどうしてもそれができなかった。

聞きたいようで、聞きたくない……。

「紅茶入れたよ」

「ありがとう、アゲハ」

ふと目を向けるとベルは薔薇の香りを嗅ぐように顔を近づけて——そしてピンクの薔薇に軽く口付けをした。

ちよ……なにやってんのよ！

見てはいけないものを見た気がして、あたしは急いで視線を逸らした。

ベルは薔薇に口付けをしたのよ、あたしじゃなくて！

けれど心臓は、この瞬間に目覚めたかのようにドクンドクンと脈を打ち始める。

あの薔薇があたしだったらいいのに——そんな想いを打ち消すようにあたしは首を振った。

「あのね、あたしイイコト思いついたの！」

鞆からレターセットを取り出してベルの前にずいと出す。

「これで優花さんに手紙を書くの。もちろんここの住所宛に」

ベルはティーカップを横に置き、よくわからないと言う顔をあたしに向けた。

「もし優花さんが郵便物の転送サービスに申し込んでいたら、その手紙は新しい住所に転送されるのよ」

「そうか！ そしたらユーカから連絡が来るかもしれないんだね？」

あたしは笑顔で頷いた。手紙が届けばベルは優花さんと会う事ができる——。

でも、もし届かなかったら？ 届かなかったら、ベルはまだここに住む事になる。

こら、余計な事は考えるな、あたし！

でもどうしてだろう、さっきからずっと胸が苦しいんだ。

「ね、ねえ聞いてもいい？ 優花さんとはどうして出会ったの？」

「最初はね、手紙を貰ったんだ」

そう言ってベルは視線をあたしの斜め後ろを眺める。視線の先はベルが持ってきていた楽器ケース。

「僕はジェノヴァでバイオリンの国際コンクールに出席していて、演奏が終わったあと僕宛てに、と手紙を受け取ったんだ。そこには自分も夢に向かって頑張っている、応援していると書かれていて——その手紙を貰った時、すぐに会いに行かなければって思った。何かに突き動かされるような感覚で、きっと運命なんだって思った……」

ベルは思い出すように目を瞑ると、続きを語り始めた。

「名前の音読みからすぐ日本人だって気付いた。すごく嬉しくて、どうしても会いたくて彼女を探した。音楽学校に通っている学生だと知って会いに行った。でも結局会えなくてね——知り合いの教授がいたから、彼女に僕からの手紙を渡してくれるように頼んでおいたんだ。そしたら数週間後に日本からエメールが届いた……」

優花さんは夏休みを利用してイタリアの音楽学校に通っていた。オペラ歌手を目指している音大生で、夢に向かって頑張っていて、そして音楽を通じて運命的に出会った二人は意気投合して文通を始めたのだ。

会って話す事を望まず、大陸を越えて夢と手紙だけで繋がった関係——それを人は運命の赤い糸とも言うのだろう。

「二人で約束したんだ。お互い夢を叶えたら、一緒に暮らそうって

——」

そう話すベルがすごく眩しく見えて、あたしは彼から視線を逸らした。

これ以上は耐えられなかった。自分で聞いておいて、続きを聞きたくないなんて思うとは、我ながら我儘すぎる。

「アゲハ？ どうしたの？」

「な、なんでもない、すごく……素敵な話だなんて思って」

自分の気持ちに嘘を吐く度に、石を呑み込んだように息苦しくなってくる。

ねえ、あたし今——ちゃんと笑っている？

「素敵な話じゃないよ……結局、僕は夢を諦めたのだから」

ベルは自嘲気味に呟いた。

「どうして諦めちゃったの？」

「うわ、あたしのバカ！ 聞いていい事と悪い事があるでしょう！「家の仕事の手伝いをしないといけなかったんだ……約束の期限がきてしまったからね」

勝手に口をついて出てしまった言葉にベルは嫌な顔をせず答えて

くれた。

「家族と約束をしていたんだ。期限内にコンクールで1位を取れなければ——音楽の道を諦めて稼業を手伝うって。結局2位止まりだった——だめだったんだ」

「そんな、2位でもすごいじゃないの！」

「そうかな？ 結局意味のない地位だよ……」

もうすぐ手に届いたかも知れない夢を諦める事は、きっと身を切るくらい辛いはずだ。しかもそれは優花さんとの約束を守れなかった事を意味している。

「ユー力はきつと軽蔑するだろうと思ったけど、そんな僕をなぐさめてくれて……だから結婚を申し込んだ。夢を諦めたこんな僕でも受け入れてくれたから——」

「優花さんに早く会えるといいね」

「うん、ありがとう……」

ベルは切なげに微笑んただけだった。

「はぁ……」

食器を洗っていたら勝手にため息が出た。

夢——それは、あたしが持っていないもの。

夢も、それを追いかける情熱も、夢を諦める辛ささえわからない。だからベルを慰める事もできない。

あたしはスタート地点にも立っていないのだと痛感した。優花さんが羨ましいと思ったのはこれで何回目だろう？

こんなあたしがベルの横に立ちたい、並んで歩きたいなど考えること事態がおこがましい。

好きになる事さえも許されない。

あたしだって最初から夢がなかったわけじゃない。けれどいつ失ったのかと聞かれれば曖昧な答えしか言えない——覚えていないのだ。

昔は絵本作家になりたかった。夢と希望が詰まった宝箱のような絵本を作りたかった。

けれどいつの間にかそんな夢は露へと消えていて、あたしはまったく関係ない大学へ進学して、そのまま大手だから安心という理由で今の会社を選んで就職した。志望理由なんて4年も経った今、覚えていないのが現状だ。

毎日がいつも同じで、忙しくて、単調な日々を過ごすうちに、夢も希望もどこかへ忘れて置いてきてしまったのだと気付いた。

「高校に入ったら本当は文芸部に入ろうと思ってたんだよね」
けれどあたしはクラスメイトに頼まれてサッカー部のマネージャーになった。

本当に適当で、周りに流され続けた人生——ミヤマアゲハって、なんてつまらない人間だのだろう。

「もう中に入ったら？ 風邪ひいちゃうよ」
ベルは寒いのにずっとベランダにいる。星空を見つめて考え事をしているようだった。

「うん、もう少し……」
そういえば、初めてあった時もベルは空を見ていた。
どこかで同じ星空を見ているだろう優花さんに想いを馳せているのだろうか。

この日本のどこかにいるであろう愛しい人を想って——。

「大丈夫、きっと会えるわ。あたしはその手伝いをするの。そうするって自分で言ったんじゃない！」

誰もいない部屋であたしは一人呟いた。
落ち込んでなんていられない。あたしにも今できることがあるのだ。

それはベルナルドと優花さんの途切れてしまった赤い糸を蝶々結びしてあげること！

あたしとベルの運命はここでちょっとだけ交わっただけで今後はすれ違いもしないのだろう。

あたしがここまで手伝う義理がなくても、ベルには絶対に幸せになつて欲しいから。

そうでしょう？

それに、これがうまくいったら、あたしもこの世界のどこかにいる誰かと全力で恋愛できるかもしれないって思うんだ。

もちろんベル以外の男性とだけど――。

…… 本当に恋愛できるって思ってる？

またひとつ、あたしから大きなため息が漏れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8407x/>

恋の悩みを知る君は

2011年12月4日03時14分発行